毛澤東選集

第二卷

三一書房

一九五七年十月二十五日　発行

毛澤東選集　第二卷

定価　七五〇円

編者　毛澤東選集刊行会

発行者　田畑弘

印刷所　京都市下京区西洞院七条下ル　内外印刷株式会社

製本所　京都市下京区油小路正面　株式会社古川製本所

発行所　株式会社三一書房
京都市左京区北白川西平井町二四
電話吉田(7)三一〇〇一番
振替京都六四〇三三番
東京都千代田区神田神保町一ノ一四
電話東京(29)一八五一一番
振替東京八四一六〇番

検印廃止

三一書房

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

全四巻　第二回配本

凡例

一、これまでの本選集日本語訳には、三一書房刊行青表紙六冊本と「三一新書版」七冊本（いずれも原本第三冊まで）があり、青表紙B6版六冊本のはじめの二冊には、中国原本になかったものを、日本の読者の参考にと考え、附録としてのせておいた。しかし、その後、中共毛澤東選集出版委員会の意見にしたがい、その方針をあらためて、原本どおりにした。「三一新書版」および本版は原本第二版によっており、原本第二版は第一版にくらべて、各篇の排列が多少ことなっており、また、著者によって多少訂正されている部分がある。なお、毛澤東選集出版委員会の註釈にも多少の訂正や削除があり、新しい註も一、二加えられている。新書版および本版はこれらの点をすべて原本第二版によって訂正してある。原本第四巻がちかく出版されるので、本版にはこれを加える。

一、はじめの旧訳本には誤植、誤訳、不適訳のところがかなりあり、不十分なものであった。新書版では根本的な改訳をおこなったが、なお、誤植がかなりにあった。本版はこの点を改めるとともに、部分的に訳の調子をあらためた。

一、改訳にあたっては、中国外文出版社版英語分冊本、ロシア語訳本、ロンドン英訳本を参照した。部分的にはドイツ語訳本をも参照した。これら語本で多少解釈を異にしているところについては、いずれにもかたよらず、併せ参照しながら、われわれ独自の理解で訳出した。

一、段落を原本どおりにすると、改行がすくなく、読みづらいので、改行を多くするために、段落のきりかたはロシア語

訳本にしたがった。この点では、英訳本も原本どおりにせず、改行を多くしている。

一、註のつけかたについては、毛澤東選集出版委員会の原註は〔一〕、〔二〕……で各篇の論文の終りに原本どおりにいれ、訳註は〔1〕、〔2〕……で各段落の終りにいれた。なお、理解を容易にするため、訳者が補ったことばは、そのことばのつぎに〔……〕でいれた。文中にある（……）括弧内のことばは原著者の補足である。

一、読者ならびに各方面の権威者の方々の御援助により、旧訳にあった不備や誤訳は著しく改められたものと信じているが、なお、今後とも、この偉大な理論と経験の豊庫を正しく日本国民につたえ、日本国民のものにするために、不備な点をあらためるよう努力してゆきたい。ここに援助と叱正を切望するしだいである。

一九五七年九月

日本毛澤東選集刊行会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

第二次国内革命戦争の時期（つづき）

実践論……一一

矛盾論……三一

抗日戦争の時期

日本の進攻とたたかう方針・方策および前途……八三

一、二つの方針……八四

二、二つの方策……八七

三、二つの前途……九二

四、結論……九二

すべての力を動員し、抗戦の勝利をたたかいとるためにたたかえ……九五

自由主義に反対す……一〇三

国共の協力関係が成立した後の差し迫った任務……一〇七

イギリスの記者バートラムとの談話……一三
中国共産党と抗日戦争……一三
抗日戦の情勢と教訓……一三
抗日戦争における八路軍……一三七
抗日戦争における投降主義……一三三
民主主義制度と抗日戦争……一三四
上海・太原陥落後の抗日戦争の情勢と任務……一三九
一、当面の情勢は部分的抗戦から全面的抗戦への過渡期にある……一三九
二、党内でも、全国でも、投降主義とたたかわなければならない……一四四
党内では階級、投降主義とたたかうこと……一四四
全国では、民族投降主義とたたかうこと……一四九
階級投降主義と民族投降主義との関係……一五一
陝西・甘粛・寧夏辺区政府と第八路軍後方司令部の布告……一五七
抗日遊撃戦争の戦略問題……一六一
第一章　なぜ遊撃戦争の戦略問題をとりあげるのか……一六三
第二章　戦争の基本的原則は自己を保存し、敵を絶滅することである……一六四
第三章　抗日遊撃戦争の六つの具体的な戦略問題……一六五

第四章　防禦戦中の進攻戦、持久戦中の速決戦、内線作戦中の外線作戦を主動的に・伸縮自在に・計画的に実行する……一六七
第五章　正規の戦争への協力……一七七
第六章　根拠地の樹立……一八〇
第一節　根拠地の種類……一八二
第二節　遊撃区と根拠地……一八四
第三節　根拠地を樹立する条件……一八七
第四節　根拠地の強化と発展……一九〇
第五節　敵と味方のあいだの包囲の種類……一九一
第七章　遊撃戦争の戦略的防禦と戦略的進攻……一九三
第一節　遊撃戦争における戦略的防禦……一九三
第二節　遊撃戦争における戦略的進攻……一九七
第八章　運動戦への発展……一九九
第九章　指揮関係……二〇一
持久戦について……二〇七
問題の提起……二〇七
問題の根拠……二一八
亡国論を反駁する……二三三
妥協か抗戦か？　腐敗か進歩か？……二三八

亡国論は誤りであり、速勝論も誤りである……二三三
なぜ持久戦なのか……二三四
持久戦の三つの段階……二三八
錯綜した戦争……二四九
恒久平和のためのたたかい……二五三
戦争における能動性……二五六
戦争と政治……二五八
抗日の政治的動員……二六〇
戦争の目的……二六三
防禦中の進攻、持久中の速決、内線中の外線……二六五
主動性・柔軟性・計画性……二六九
運動戦・遊撃戦・陣地戦……二八三
消耗戦・殲滅戦……二八七
敵の隙に乗ずる可能性……二九一
抗日戦争における決戦の問題……二九四
兵士と人民は勝利のもとである……二九八
結論……三〇三
民族戦争における中国共産党の地位……三一一
愛国主義と国際主義……三一三

民族戦争における共産党員の模範的な役割……三一四
全民族の団結と民族内部の敵のまわし者にたいする闘争……三一六
共産党の拡大と敵のまわし者の潜入をふせぐこと……三一七
統一戦線の堅持と党の独立性の堅持……三一八
全体のことを考慮し、多数のことを考慮し、そして同盟者といっしょになって仕事をすること……三一九
幹部政策……三二〇
党の規律……三二三
党の民主主義……三二四
わが党はすでに二つの戦線での闘争で強固になり、成長してきている……三二五
当面の二つの戦線での闘争……三二八
学習……三二九
団結と勝利……三三二
統一戦線における独立自主の問題……三三五
援助と譲歩は消極的でなく、積極的であるべきである……三三六
民族闘争と階級闘争の一致性……三三七
「すべては統一戦線を通じて」というのはただしくない……三三八
戦争と戦略問題……三四一
一、中国の特徴と革命戦争……三四三

二、中国国民党の戦争史……三四六
三、中国共産党の戦争史……三四九
四、国内戦争と民族戦争における党の軍事戦略の転換……三五一
五、抗日遊撃戦争の戦略的地位……三五四
六、軍事問題を注意深く研究せよ……三五七
五・四　運　動……三六一
青年運動の方向……三六五
投降の動き反対せよ……三七七
反動派は制裁すべきである……三八五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第二次国内革命戦争の時期（つづき）

実　践　論*

認識と実践との関係―知識と行動との関係―について

（一九三七年七月）

＊わが党内では、一部の教条主義的な同志たちが、長いあいだ、中国革命の経験を〔摂取することを〕こばみ、「マルクス主義はドグマ〔教条〕ではなくて行動への指針である」という真理を否定し、マルクス主義文献中の個々の語句を、咀嚼もせずに借りてきて、人々をおどしつけたことがある。さらに、他の一部の経験主義的な同志たちは、長いあいだ、自己の断片的な経験を墨守し、革命の実践にたいする理論の重要性が理解できず、革命の全体が見えないで、熱心に働らきはしたが、盲目的であった。これらの二つの種類の同志たちの誤った思想、とくに教条主義的な思想は、一九三一年から一九三四年にかけて、中国革命にきわめて大きな損失をもたらしたが、教条主義者たちは、かえって、マルクス＝レーニン主義の外衣をまとって、多くの同志たちを迷わせた。毛沢東同志の『実践論』はマルクス主義的認識論の立場から、党内における教条主義と経験主義――とくに教条主義の――主観主義的な誤りを暴露するために書かれたものである。その重点が実践を軽視する教条主義という主観主義の暴露にあったので、『実践論』という題名がつけられた。毛沢東同志は、この論文の見地から、延安の抗日軍事政治大学で講演したことがある。

マルクス以前の唯物論は、人間の社会性をはなれ、人間の歴史的発展をはなれて、認識の問題を考察した。そのため、認識が社会的実践に依存する関係、すなわち認識が生産および階級闘争に依存する関係を理解することができなかった。

まず、第一に、マルクス主義者は、人類の生産活動がもっとも基本的な実践活動であり、その他のあらゆる活動を決定するものであると考える。人間の認識は、主として、物質的生産活動をよりどころとして、しだいに、自然の現象、自然の性質、自然の法則性、人間と自然との関係を理解するようになり、さらに、生産活動を通じて、いろいろ程度の差はあるが、また人と人との一定の相互関係をも、認識するようになる。これらのすべての知識は、生産活動をはなれてはなに一つ得られるものではない。階級のない社会では、人はすべて、社会の一員としての資格で、社会の他の成員と協力し、一定の生産関係をむすび、生産活動に従事して、人類の物質生活の諸問題を解決する。あらゆる階級社会では、それぞれの階級の社会的諸成員は、また、いろいろな異なった仕方で一定の生産関係をむすび、生産活動に従事して、人類の物質生活の諸問題を解決する。これが、人間の認識が発展する基本的な根源である。

人間の社会的実践は、生産活動という一つの形態にだけかぎられるものではなく、そのほかにも、階級闘争、政治生活、科学活動、芸術活動などの多くの形態がある。要するに、社会の実際生活のすべての領域には、みな、社会の人々が参加している。したがって、人間は物質生活からだけでなく、なお、そのほかに、政治生活、文化生活（物質生活と密接につながっている）のなかからも、いろいろ程度の差はあるが、人と人とのさまざまな関係を認識する。そのうちでもとくに、いろいろな形態の階級闘争は、人間の認識の発展に深い影響をあたえる。階級社会にあっては、人はみな一定の階級的な地位にあって生活しており、階級的な烙印をおされていない

ような思想は一つも存在しない。

マルクス主義者は、人類社会の生産活動が、一歩一歩、低い段階から高い段階へと発展してゆくものであり、したがって、人々の認識も、また、自然界についても、社会についても、みな、一歩一歩、低い段階から高い段階へ、すなわち、浅いものから深いものへ、一面的なものからより多面的なものへと、発展してゆくものであると考える。歴史のきわめて長い期間にわたって、人びとは、社会の歴史について、一面的な理解しかできなかった。これは、一方では、搾取階級の偏見がつねに社会の歴史をゆがめていたからであり、他方では、生産規模が狭小で、人びとの視野が限られていたからである。人びとが社会の歴史の発展について、全面的に歴史的に理解できるようになり、社会についての認識を科学にかえうるようになったのは、ようやく巨大な生産力――大工業――にともなって、近代プロレタリアートが出現したときからであり、これがマルクス主義の科学である。

マルクス主義者は、人びとの社会的実践だけが外界についての人びとの認識の真理の規準であると考える。なぜなら、実際の事情はつぎのとおりだからである。社会的実践の過程において（物質的生産の過程、階級闘争の過程、および科学的実験の過程において）、人びとがその考えのなかで予想していた結果に到達したばあいにだけ、人びとの認識は実証されるのである。人びとが仕事に成功しようとするには、すなわち、予想した結果をえようとするには、どうしても、自分の考えを客観的な外界の法則性に合致させなければならない。もし合致させなければ、実践において失敗するであろう。失敗しても、失敗から教訓をつかみ、自分の考えをあらためて、これを外界の法則性に適合させるようにすれば、失敗を成功にかえることができる。「失敗は成功の母」とか「一度、溝におちればそれだけ利口になる」とかいわれるのは、この道理をさしている。弁証法的唯物論の認識論は、実践を第一の地位におき、人間の認識を実践からすこしも切りはなせないものと考え、実践の重要性を否定

し、認識を実践から切りはなすすべての誤った理論を排斥する。レーニンはつぎのようにいった。「実践は《理論的》認識よりも高いものである。なぜなら、実践は普遍性という特徴をもっているばかりでなく、さらに直接的現実性という特徴をももっているからである。〔一〕」

マルクス主義の哲学、すなわち、弁証法的唯物論には、二つのもっとも著しい特徴がある。一つは、その階級性であり、それは、弁証法的唯物論がプロレタリアートに奉仕するものであることを公然と言明する。もう一つは、その実践性であり、それは、理論が実践に依存する関係、すなわち、理論の基礎が実践であり、理論がまた転じて実践に奉仕するものであることを強調する。認識または理論が真理であるかどうかの判定は、主観的にどう感じるかによってきまるのではなくて、社会的実践の結果がどうなるかによって客観的にきまるのである。真理の規準は社会的実践でしかありえない。実践の見地は弁証法的唯物論における認識論の、第一の、そして基本的な見地である。〔二〕

ところで、人間の認識は、結局どのようにして実践から生れ、またどのようにして実践に奉仕するのか。このことは、認識の発展過程を見さえすれば、明らかになる。

がんらい、人間は、実践過程においては、最初は、ただそれぞれの事物の現象面を見、それぞれの事物の一面を見、それぞれの事物のあいだの外面的なつながりを見るにすぎない。たとえば、よその人びとが延安に視察にやってきたとする。最初の一両日中は、かれらは延安の地形・街路・家屋を見、多くの人々に接触し、宴会や夜会や大衆集会に参加し、いろいろの話をきき、いろいろの文献をよむ。これらは事物の現象であり、事物の個々の一面であり、またこれらの事物の外面的なつながりである。これは認識の感性的段階、すなわち感覚と印象の段階とよばれる。つまり、延安のこれらの個々の事物が視察団の人びとの感覚器官に作用することによって、か

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com